特253
564

長校學女等高秋錦

秋間為子女史の足跡

日統社編

日統(第二十輯)

3
5

始

特25
56

錦秋高等女學校長

秋間爲子女史の足跡

日統社編

日統社刊行

發行所寄贈本

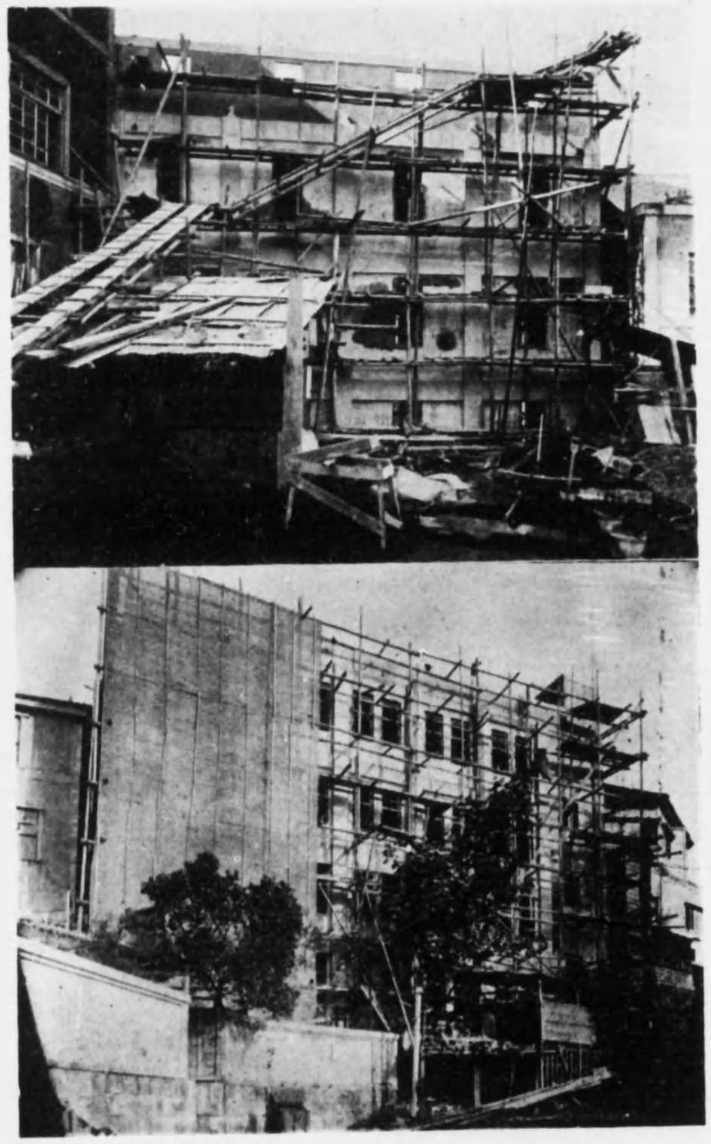
錦秋高等女學校長秋間爲子女史近影

敬

神

為子

秋間女史の筆蹟



(上)校學女等高秋錦の中築增
(下)面側の校學女等高秋錦全

目次

一、敬神崇祖の強調……一
二、教育家としての秋間校長……四
三、錦秋高等女學校の沿革……八
四、錦秋高等女學校の現在……一一
五、夜間教授錦秋高等實業女學校……一二
六、德育涵養の同校趣旨……一四

秋間爲子女史の足跡

一、秋間女史の搖籃時代……一七
二、結婚と離婚後の奮鬪……二〇
三、看護婦教育より主婦教育へ……二三

四、日清日露兩役に從軍の女史……二四
五、慈善事業の數々……三一
六、至難なる學校經營……三六
七、大震災當時の女史……三八
八、修養と信仰への道程……四〇
九、最近の光榮……四一
一〇、日常生活……四二
一一、女史の趣味と生き葬式を出す心境……四四

錦秋高等女學校長

秋問爲子女史の足跡

日統社編

敬神崇祖の强調

現在の我國民にとつて、最も重大な問題は金甌無缺の光輝ある我國體に對して、恐るべき反國家主義的な、左傾思想が一部に出來、爲に國家の理想が、漸次に忘れられやうとすることゝ、極端な唯物的な物質思想が擡頭して、國民の精神が弛緩したことである。

我が日本の國體は云ふ迄もなく、悠久の昔から、畏れ多くも萬世一系の皇室を中心として、我等大和民族の上に傳つて來た、民族的な信念である。然もこれは歴史的事實であつて、それ自身

が既に理論を超越したところの、絶對的國民性である。

況して現在の我が憲法にも、明かに示されてゐるが如くに、我國體の大義は闡明されてゐるのである。故に我が國民にとつては、今更ら國體問題などと論議するの必要はない。然るにこの當然過ぎる程解りきつた事を、現在我が國に於て、日本主義、國家主義、國本主義などと、國家觀念を喚起する運動が勃興する樣になつたのは、國民の理想と國民性が、愈々忘失されやうとする現狀だからである。

理想は人間のあらゆる完全と憧憬であつて、凡ての調和も充實も、こゝにある。故に人間は、悉く全知全能の神樣でない以上は、限りない理想を追つて進んで行くところに、進步發展があり又無窮の充實があるのである。故に若し人間各自が精神生活から一度、斯うした理想を取り去つたならば、人生の行路が如何に暗い寂しいものであるかは、思ひ半に過ぎるであらう。

理想は云うまでもなく、現實の超越であつて、魂のあこがれである。爲に人間の心が、物質偏重となつて、現實に執着するやうになれば、理想は漸次に低下して、國民精神の弛緩となる。而

して終には、國體觀念さへも、稀薄となるは當然である。

故に國民精神の緊張と、國家の充實と發展を期さうとするには、國民の理想を闡明にして、國民精神と、皇室を中心とした、國體思想とを喚起しなければならぬ。それには常に國民に對して敬神、崇祖の信念を養ふことゝ、道德的情操の徹底を期せなければならぬ。

此の秋に際して、敬神崇祖、婦德の涵養、勤儉質素をモットーとして、自ら實踐躬行し、然も全生涯を育英事業に傾注されてゐる、錦秋高等女學校長秋間爲子女史を知つた筆者は、その崇高なる人格と、確乎不拔の宗教的信念は、精神的教育の高調される現在の社會に、最もよき教育家として、又我國三四女流教育家の逸材中の隱れた一人として、見出したことを喜ぶものである。

嘗て秋間女史が私財一切を投げうつて、自己の錦秋高等女學校を財團法人となし、塵一つ私有せず、然も獨立獨行の過去の美しい足跡を、死んだ後まで護らうとする强い宗教的信念から、今度生きながらの葬式を行ふのである。一面これを以て稀なりとするものもあるが、今日まで女史が一切人の世話によらず、何事も自己の力によつてのみ爲しとげた、現在の心境を知るものは、

斯くあることを不思議とは思はないであらう。

崇高な女史の心理的轉機を機會として、女史の生命である錦秋高等女學校の現在と、女史が今日の徹底した、宗教觀をもつまでの、過去の足跡を掲げて、精神主義、秋間イズムを世に紹介したゐのである。之れ獨り女史の喜びのみならず、自力更生の秋に際して國民精神緊張の一端ともなり、且國民理想に對して、一道の光明を與へるものと確信するものである。

教育家としての秋間校長

教育の目的は言ふまでなく、人が人を有意的に、成案的に、繼續的に感化善導することである換言すれば主體である人が、客體である人を人格的に爲し、將來如何なる業務に就くに當つても其の品性を保つて社會の信用を得、他の誘惑に動かされず、確乎とした精神と健康な身體を持つ人物を養成するのである。

故に直接教育の任に當る人の人格が、子弟教育の上に重要視されるのは、當然であり、而かも

その健康問題にまで　留意されるのは、虚弱な身體に、到底健かな精神も人格も具備されることが、出來ないからである。

故に最近の國民思想に對して各女學校とも、女子の道德的性格の陶冶を、教育の根本方針として、愈々眞面目に進められやうとしてゐるが、錦秋高等女學校の如きは、創立以來女史の崇高な信念に基き、女史の精神主義の訓育をモットーとして、極力道德的德性の涵養と、堅實な精神養成に努めてゐる。

而も女史は敬神崇祖德性涵養の基本として、君民が一和して、上下一致する、皇室と、國家と國民とが渾然として融合一體となる信念を高調してゐる。此の國民的精神の充實に於て、眞に社會の統制も保たれ、道德的國民生活も行はれるのである。更に又祖先に對しての絶對無限の感謝敬慕は、人間の自然的人格化となるのである。

訓育とは言ふまでもなく、正しい意志を以て國民道德の實踐に努める、理想的國民を作るのであるから、その教育者の人格、德望が要求されるのは當然である。故にこの仕事が教育家として

も、最も困難とされてゐるのであるが、又これが國民教育中で、一番重要なのである。

現在市内にある多くの女學校中には、高潔な人格と德望とを以て、子女訓育に努められてゐる方もあらうが、秋間女史の如きは、その人格に於て、實踐躬行に於て、最も適當な一人である。而も女史は精神主義、訓育に自己の全靈を捧げ、子女の道德的情操の陶冶に一身を犧牲とした人である。その上勤儉質素を奬勵して、自らその實踐躬行の範を示し、極力訓育の徹底に努められてゐる。

例へば、學校の經營方針などは、よく女史の人格を裏書するものであると思ふ。何人も私立學校と言へば表面は兎も角、實質的には營利本意であつて、教育は第二義的であるとの先入觀がある。これは近年學校經營が企業化して、神聖なるべき教育事業によつても、これを事業化、營利化爲さうとする經營者が多いからである。

だから私立學校は殆ど悉くに、校友會費、校費、其他種々の名義で寄附金を學生の父兄から出金させ、而かもそれが慣習的に行はれてゐるのであるから、一般世間も私立學校への寄附金は普通、茶飯事の如くに考へられて、苦痛を感じながらも之れに應じてゐる有樣である。

それに反して錦秋高等女學校は、尠しも校費、校友會費等を、生徒の父兄から徴收しない點などは、當底他校の爲し得ざるところである。又學校創立以來、前後數回に渉る改增築に際して、莫大の費用を要する時にも、嘗て寄附金を仰いだことはなく、悉く女史の私財を以て之に充當したところなどは、如何に女史が育英事業に對しての高遠な理想と、犧牲的精神を以てゐるかを窺ふことが出來るであらう。

女史は斯くの如くに、教育事業に盡瘁したのみでなく、後掲の女史足跡にある通りに、愛國婦人會、慈善事業其他各種の國家社會事業に貢献したことは、今更枚擧するまでもない。

畏くも、我國婦人としての特例な數々の光榮に浴してゐるのを見ても知ることが出來る。國民の道德的德性、又は女史の婦德は、道德上の知識卽ち知育によつて與へられるが、道德的知識のみにて、道德の實行が出來るとは言へない。

道德上の知識を與へると俱に、その感情を發揮せしめて、日常によい習慣を作るか又は、善事

を實踐躬行によつて感化せしめ、實行の練習が、之れを習慣とならしめた時に於て目的が達せられるのである。故に女史の實踐躬行と、尊い犧牲的精神と清廉なる人格は、子女訓育の上に於て最も典型的教育者である。

又女史の衣は寒さを凌ぎ暑さをいとふ爲めであり、食は空腹を滿す爲め、家は雨露を防ぐ爲め財は衣食を足らしめばよしと云ふ程の實踐的勤儉と質素の躬行は、子女に對しての規範ともなるであらう。

兎も角女史は永い教育生活中にも、よく清廉を保ち現在の德望を得、數々の逆境に身を處してよく自己の使命を果し得たのは、平素の修養と宗教的な信念があつたからである。この宗教的な絶對境こそ現在の女史の人格を築き上げたものであらう。

錦秋高女等學校の沿革

錦秋高女學校！今日の入學志願、子女等の憧れの一つとなつた同校も、以前、明治三十四年頃

は、錦秋女塾と云つて、地方の遊學女子を預る一女塾に過ぎなかつた。秋間女史は此の塾で、地方遊學女子のよき友となり、又父兄母姉の代りとなつて監督し、一方將來主婦として適當なる、日常の作法、家事等を教へてゐたのである。

その眞摯な態度と、宗教的な深い愛は、よく子女をして敬慕させたものである。「錦秋」の名は當時學者として、人格者として知られてゐた、元群馬縣知事の石坂昌孝氏が名付けたのである。石坂氏も當時の女史の眞摯な態度に感じて、將來は必ず錦を着る秋間であるとの考へから錦秋が生れたのであらう。

錦秋女塾は其後八年を經て、明治四十二年に東京府の認可のもとに錦秋實用女學校となつた。當時の校長は、子爵戸田忠行氏であつて、女史は學監として學校の經營と、生徒の教養に力を盡した。然し實質上に於て學校の一切を處理してゐる關係上いくばくもなく校長としての任に當つた。

斯くして女史の宿志である、女子の道德的德性養成の外形は出來たが、我國體に對しての敬神

崇祖の觀念を、眞に我國古來の婦德の美風である、從順禮節を徹底させて、女子の完全な道德的人格を敎養することの出來るのは高等女學校であると考へた。加ふるに時代の進歩は、愈々高等女學校への氣運を釀成して、大正元年十月には文部大臣の認可を得て、錦秋高等女學校を設立して自ら校長となつた。

大正十五年には、錦秋中等實業女學校をも設立して、夜間女子の勉學の爲めに、女子に必要な學術技藝及び、獨立自營の爲めに要する必要事項を授けることゝした。之れが今日の錦秋實業高等女學校の前身であつて、今日東京市內に於ても、夜間實業學校として、晝間女學校と同じ資格を有するのは市內に二校あるに過ぎないのである。

錦秋高等女學校も始めは定員三百五十名程であつたが、女史の人格を慕ふものが、續々として入學を志望して、校舍の增築四回に及んだが尙狹隘にして收容しきれず本年第五回目の鐵筋コンクリート八敎室を增築するの校運である。

尙昭和二年十月三十日女史年來の宿志である、身を育英事業に捧げ、國家社會に對しての幾分の報恩なりとの信念のもとに、私財一切を投げ出して之れを法人組織變更の申請をなし、昭和二年十二月二十一日に許可となつて玆に財團法人錦秋學園となり、錦秋高等女學校と錦秋實業高等女學校の二校もこの學園經營に移つたのである。

錦秋高等女學校の現在

小石川春日町の市電停留所から、約一町程、なだらかな坂を登ると、右手に極めて質素に見えるが巍然として何處となく奧ゆかしい學校がある。之れが云までもなく、錦秋高等女學校である。正確に云へば本鄕區眞砂町三十五番地で、本鄕、眞砂町市電停留所からでも約一町、省線水道橋で下車すれば約三町程の最も交通至便な所に在る。

入學資格其他は一般女學校と同じく、高等女學校令に準據してゐるのであるが、特に揭げなければならぬのは、同校の一特色である特待生のことである。之れは操行、學術ともに優秀で、體格の强健なものを、授業料全部免除することは勿論であるが、社會に俊才、逸才と云はれる程成

績優秀な兒童でも、あたら資力乏しき爲めに、世の中に埋れ朽ちて行く現狀に鑑みて、之等俊秀可憐な兒童を特待生として、社會有用なものと爲さんことに努めてゐる點である。

尙此の外、寄宿舍も設備されてゐるから、遠隔の地などの通學上に不便なものや、精神的修養を爲さうとするものは利用することが出來る。同校は別に英數補習科を設け、英語數學の不成績な者には、學費を徵收せず、放課後一週數時間補習教授を行ふ、尙本校卒業の上更に專門學校に進まんとする者の爲に、高等補習科を設置し、之に必要なる學科を選擇して教授してゐるがその成績大に見るべきものがある。

夜間教授錦秋高等實業女學校

同校は前揭の高等女學校と同一の場所に在り、主として實社會にあつて、常に勉學の志を懷きながらも、種々の事情に依つて、暇なき人々の爲めに、特に夜間を利用して、現代社會に最も大切な學科のみを選んで實業教育を施すものである。

社會の進步發展は、女性特有の纖細な注意力と正確な計算事務等が重要視されて來て、官廳、會社、銀行、商店などの需要は愈々增加の傾向にあるから、將來女性の職業戰線も擴大されるのは勿論である。然し女性の就職に就いての一條件である、高等女學校卒業の資格は晝間學校のみであつた。

同校は夜間女學校であつて、晝間女學校と同一の資格が與へられてゐるのである。其の上實社會に必要な科目に主力を用ひられてゐるから、卒業後何所へ就職するにしても、直ちに重寶がられるであらう。

別に中等教員受驗準備としての、完全な實力を養成する爲めに專攻科の設けがある。女學校卒業生は女性としての必然的な要求として、主婦としての實質的準備としての裁縫、手藝の必要を痛感するのであるが、之等の者に對してその希望を充足し發達を期せしむると共に中等教員受驗準備の徹底を圖つてゐる。

德性涵養の同校趣旨

一、敬神崇祖の念を深からしむること。

科學文化の發展は我國傳統の美風たる、敬神崇祖の念が漸次稀薄となり、國體觀念の換起を要する時、御聖德の鴻大無邊なることを徹底せしめることが、最も肝要である。本校は秋間校長自身の强い信念に基き、講堂及び各教室に、敬神の額を掲げて、毎朝教職員生徒一同、天津神、國津神、皇室に向つて、最敬禮を爲さしめてゐる。

二、教育勅語の御趣旨に基きて教育を施すこと。

教育勅語は、我國の不朽の聖典であるから何れの學校も、この御趣旨に基いて教育するのは勿論であるが、最近の極端な思想混乱時代に當つて、より以上に御趣旨の强調を痛感するのである

同校はこの教育勅語を深く奉戴して、道德的個性の純化に努め德操を磨き、堅實な思想を養成する爲めに、毎月曜日に、校長教員生徒一同勅語奉讀を行ひ、校長自ら、之れが意義を謹述してゐる。其他毎朝教訓に資すべき事實に就き、種々の訓話をして、御趣旨の貫徹に努めてゐる。

三、婦德の涵養に留意すること。

我國古來からの美風である、婦德は漸次忘失されんとして、女子の從順、禮節は、時代錯誤な因襲的思想の如くに考へるものが出來て來た。然しながら我國の家族制度は、之れあるが爲に護られ、一家の平和も國家社會の堅實なる發展も、婦德の美風ある事が肝要である。

同校は此の点に留意して、常に時代の趨勢に從つて婦德を養ひ、何事も實踐躬行を先とするやうに指導してゐる。

四、教育の實際化を圖ること。

從來の教育は人間の人格的德性の陶冶の必要を感じながらも、多くは智的教育に偏重した感があつた。これは明治以後の急激な物質的文化の發展に連れて、科學的知識の幼稚であつた時代には必要であるが、今日の如く物質的現實思想の社會に於ては、道德的德性の俱なつた人を養成することが肝要である。

同校は、家業を重んじ、經濟に長け、勤勞を厭はざる美風を養成する爲め、社會實際の事業に注目し、家庭生活の素養を收得させる爲め、機會ある毎に見學を爲さしめ、又學校にありても、出來得るだけ、見聞を廣く爲さしめると共に、卒業後直ちに役立つ樣に教養してゐる。

五、勤儉質素を勵行せしめること。

社會の進運と俱に女子の中等教育は、必然的の要求であるが、現在の如き經濟的不況時代にあつては、極めて經濟的負擔の尠少な學校が一般に要求されてゐる。此の時に際して、秋間校長の實踐躬行主義に準じて極めて學費を節約し、保護者の負擔を輕くするやうに爲し、學用品は無用の出費を避け、傍ら生産奬勵の心を涵養し、專ら勤儉質素を旨として修學の便を圖つてゐる。而して女子中等教育の普及發達を期してゐる。

秋間爲子女史の足跡

秋間女史の搖藍時代

露霜に覆はれた武藏野一帶は、折柄の朝陽に光り輝いて、土と言ふ土には地靄がゆらめいてゐる。霜月に入つてから、珍らしく淸々しい小春日和である。この日、文久元年十一月十四日、東京府南多摩郡七生村平山に呱々の聲を擧げたのが、我が秋間爲子女史である。

我が國史に遡つて、戰國時代を考へる時、我々は必然的に武田信玄、上杉謙信の兩雄を聯想するのであるが、之等英雄の裏面には、よく之を補翼した、忠勇義烈なる將士の功績を見逃す事は出來ないのである。就中武田信玄の二十四將は信玄の股肱として、よく武士道的精神を全うした事は周知の事實である。秋間家の祖先は實にこの信玄二十四將の一人、秋間氏であつて、武田氏の沒落と共に野に下り、前記七生村に居を構へ、代々名主を勤め、苗字帶刀を許された家柄である。

平山はその昔、平山武者所季重の居つた所で、平山の姓からとつた地名であるとのことである

祖父は清八と言つて、江戸湯島の聖堂で鍛へ上げた、碩學の士であり、よく村治に力を盡された外、近隣の子供を集めて、無報酬で日用普通の學を授けたので、茲に村治の基本的精神は期せずして、之等子弟に刻みつけられたのである。

父善次郎氏は清八氏の後を受けこれ又博學の士であり、力を村治に用ひた德望家として、村民の敬慕を一身に集めたのであるが、殊に風流の嗜みさへあり、點茶、生花をよくした。

女史は祖父、實父に就き處世の學を修め、裁縫は幕臣大村氏の室に就いて學んだ。兄弟九人あつたが殆ど中折し、現在は女三人だけ健在である。長姉は「ゆき」、次姉は「その」と言つて、女史はその末女であつた。

五六才の時の女史は身體が非常に虛弱であり、母の勸めによつて、近所の藥師瑠璃光如來に、三年間日參し、毎日鍋錢を賽し、祈念した。又近村の高幡不動尊にも、燈明油を毎月一升づゝ献じて成長を祈つた。この頃女史は更に父母の慈愛により、呑龍上人の御弟子となり七才の時まで

坊主頭となり幼名を「あぐり」と付けられてゐた。

斯の如く女史の父母は、神佛に祈願をこめて成育に努めた、爲め十六七才頃は、段々身體も壯健となり、めき〳〵と發育するのであつた。これより女史は父母の信仰と、慈愛の念に深く感激し、自已の敬神の念は益々深み行くのであつた。女史の信仰は全くこうした、幼時に根ざしたものであり、今日の大成を見るに至つたことは、父母の慈愛と神佛の御加護と云ふべきである。

敬神、崇祖、勤儉、質素は錦秋高等女學校の四大教育標識であるが、實にこの思想こそ、父母の慈育愛撫に基礎を得たものであり、同校の教育精神は、秋間家に於ける家庭教育の延長であると云ふも過言ではない。

女史が子供の時は、まだ學制の頒布されない當時であつて、學校と云ふのは、所謂寺子屋であつた。父母は六才の六月六日に學問の道に入ると、將來大成するとのことで、赤飯を炊いでお祝ひし、机についたのが學問の始めであり、當時の學科は手習を主としたものであつた、半紙一帖を綴ぢ、一冊としたものを五六冊作り、毎日々々、交互にその練習帖を日向に乾して、黑光りに

なるまで用ひたのである。かゝる習慣は軈ては、勤儉質素に進展したものと思はれる。

子供の時の女史は中々の腕白者で、人の云ふことを容易に受入れず、時々師匠や兩親に誡められた。兩親は最後に「比丘尼になつて尼寺へでも這入れ」等と小言を云はれた。この小言位身に泌みた事はなかつたとの事である。

斯く、父母の慈愛によりて、信仰的に、思想的に、指導された女史は、この主義形式を子女の教育に、延長することを、祟祖の第一義と考へられたのであり、女史の教育的信念は實に秋間家の、指導精神に根ざしたものである。

結婚と離婚後の奮闘

女史は生來燃ゆるが如き向上心と、自信力を持つてゐた。父善次郎氏の代に至つて、家運の少しく傾きつゝある狀態を看破した明敏な女史は、玆に躍如として上京し、何事かを爲し遂げんと決意したのである。

當時叔父の大村平五郎氏は、德川慶喜公が未だ一ッ橋に居られた頃の御小姓役であつた。この叔父の世話により女史は、東京に居る親戚の家に落着いたのである。同家にては常に結婚の事をすゝめ、其の後女史は一度他家に嫁いだのであるが、不幸にして破鏡の嘆を見るに至つたのである。この頃女史は二十八歳であつた。

破鏡の悲しみに遭遇した女史は、一度尼生活に入らんと決心したのであるが、よく〳〵考へるに、尼僧の生活は、自分自身の安心立命に止まるのみにて、折角世に生れたる以上、何等かによつて、國家社會に貢献したい、との信念が湧き上つたのである。この勇猛心こそ、女史の天性と云ふべきであらうが、一面父母の薫陶と、信仰の力と云ふべきであらう。

其の頃嘗て女史が下女に使つてゐた者が、看護婦になつて居たが、女史の心中を察して、「看護婦は中々尊い使命を持つて居ります。お氣の毒な御病人に對して、心から力となつてお世話申上げる事は、何とも云へない喜びで御座います。看護の心得のない者が知識もなく、經驗もなく、徒に患者に接することは、隨分危險でもあり、間違つてゐます。御許樣は一旦比丘尼

になるまで、御決心遊ばしたのですから、此の心を以て、患者の天使となつては如何ですか」との言葉に勵まされ、明治二十一年十二月、帝國醫科大學の第一回看護婦募集に應じて入所し同二十二年十二月、之を卒業したのであるが、この間の苦心こそ想像に餘りあるものであつた。

然しこの苦しい看護婦生活こそ、女史の對社會的關心と、その信念を益々鞏固ならしめたのである。

看護婦教育より主婦教育へ

看護婦養成所を卒業した同輩の多くは、申し合せたやうに一個の看護婦として、所謂職業戰線に巣立つて行つた。彼等は勿論自己の使命を自覺して、よりよき病者の天使として働いてゐた。だが女史はかゝる、一般普通の看護婦として、滿足することは出來なかつた。

たま〳〵、鈴木まさ子と云ふ、陸軍少佐の未亡人の奬めにより、共同して看護婦會を開いたのであるが間もなく分離し、獨立して看護婦會を設け、又南牧師、藤原教悔師の盡力により、壹岐坂の獨逸協會を借り、看護婦學校を始めたのである。

これより日增に發展し、別に本郷元町に、病者宿泊專養館を設立した。その後益々發展して、本郷區金助町に家を買ひ、看護婦學校も此處に移したのであるが、明治三十一年三月火災に遭ひ遂に烏有に歸するに至つた。

女史はこの火災に遭遇するも、何等失望せず、却て天神の試練として之を喜び、一層の努力を續け、立ちどころに復興を見るに至つた。此の當時の女史の奮闘には　全く涙ぐましいものがある。女史はこの頃、瘧疾を患つてゐたのであるが、終日痛苦を忘れその監督に當られた。現在でもその時の記念として、左の拇指が少しく短くなつてゐる。

かくして看護婦學校は、復興したのであるが、女史の素志は看護婦としての、子女を養成するのみの狹隘のものではなかつたのである。卽ち女史の願ふ處は、主婦としての適當な婦人を教養することにあつたのである。されば茲に看護婦養成の事業を中止し、小學校卒業以上の女子の教育を行ふ爲め、錦秋女塾を開設するに至つたのである。

日清日露兩役に從軍の女史

明治二十七年日清の役は勃發したのであるが、この頃はこの度の滿洲事變に對しての帝國とは國狀を異にし、我國としては、新兵器による洋式戰術の實行と、清國と言ふさしもの大國を控へて、國論は鼎の沸くが如く、その敵愾心は、天を衝くが如く、上下擧つて、義勇奉公の至誠に驅られてゐた。

出陣の兵は日々市街に溢れ、驛頭に漂る萬歲の歡聲は帝都の空を震憾せしめたのであつた。報國盡忠の意氣に燃える女史は、女なるが故に、出征するを得ざる悲しみを幾度か、嘆じた事であらう。男子のみが直接戰線に立つて、奮鬪することに對し、同じく日本國民として、女なるが故に、燃え猛るる義氣を、抑制するの不合理を、幾度か嘆ち、熱涙にむせんだ事であらう。

然し女史は、看護婦として從軍するの可能性を思ひ。ひそかに其の意を强ふするのであつた。而も激戰は日に〳〵新聞紙上に報道せられ、其の終熄は豫測を許さぬ狀態であつた。茲に於てか

女史は、斷然その素志を貫徹して從軍し報國の至誠を盡すべく、部下十數名の看護婦と相謀り、遂に從軍の準備を爲して、機の至るを待つたのである。

既に從軍の準備を爲した女史は、萬遺漏なきを期せんとしたのであるが、其處には一つの惱みがあつたのである。

即ち、戰爭が永びくとしても、服と小遣は生徒の父兄から送つて戴く事にしたのであるが、次に來るものは食糧の問題であつた。これこそ先決問題であるので、之が解決を圖るべく、當時岩崎家の母堂は非常な慈善家であつた爲め、之に依賴すべく、自ら染井の同家別邸を訪れたのであるが、遂に面會を斷られたのである。然し熱心に申上げた處、執事の山田稔氏が面會したので、來意を告げると、氏は、「それは結構な事ですから、運輸會社の副社長にお會ひなさい」と申されて紹介狀を與れたので、早速副社長の駿河台の邸を訪問すべく、水道橋まで來たのであるが、途中ふと考へたことは、その頃、大日本赤十字社の計畫員であつた、奥田子爵は中々の俠氣で、譯の分るお方だと聞いてゐたので、其處から道をかへて、奥田子爵を訪問し、從軍熱望の事を申上

げた處、大いに之に替成し、盡力を約したので、之に力を得て歸宅したのである。

然るに同子爵は暑中になつたので、歸國される爲め、根津の分家へ依頼して行かれたのである。そこで根津のお邸に伺ひ、石黒軍醫總監への紹介狀を戴き、早速牛込楊場町の石黒總監を訪問したが、多事多端の折柄と言つて、一たまりもなく面會を謝絶されてしまつたのである。

當時同邸には猛犬が居り、恐ろしく吠えられたのであるが、女史はこの猛犬を威嚇する程の赤誠に燃えて居たのである。

その後も百方奔走に努めたのであるが、たま〳〵奥田子爵より、その後の樣子を尋ねられたので、まだ御面會出來ぬ旨を告げると、子爵は御親切に色々と斡旋され、逐に總監に面會するの機會を得たのである。

念願の叶つた喜びにふるえつゝ、女史は奥まつた應接間に案内されたのである。其處には總監御夫妻が微笑を投げかけてゐた。此處で食糧の問題もお引受けになり、その上、一週間位經つとこちらからお沙汰するとの事で、高潮した面のほてりを覺へつゝ歸宅したのであつた。

一週間目になつた、然し從軍の御沙汰は夜に至つてもなかつたのである。お使ひ、郵便、速達書留、總べてを善意に考へつゝ八日目も過ぎてしまつた。九日目も十日目も逐にその通知は無かつたのである。今は待つ氣力もなく、とうとう陸軍省の醫務局へ石黒總監を訪問した。然し今會ふ必要はない、と一言のもとに拒絶されてしまつた。

其處で又奥田子爵を訪問し、その經過を報告し、色々とお尋ねしたのであるが、更に手應へもなかつたのである。今は全く失望した女史は逐に、弟子達に斷念の宣告を與へてしまつた。此處に至るまでの女史の心情には、餘りにも崇高な痛ましさがあるのである。

斷念したものが偶然成功した時程、嬉しい、喜ばしいことはないのである。この年十月十日である。赤十字社から狀箱入の手紙が來て、直ちに出頭せよとのことであつた。複雜した想像の糸をたぐりながら、當時飯田町にあつた、赤十字社へ出頭し、佐野社長に面會すると、其處に居並んだ大勢の名士から、「今回の御篤志の程は厚く御禮申上げます」と云はれた時、大體は想像して行つたものゝ、その一度は斷念さへしただけに、事の進捗に、眼瞼の熱くなるのを覺えた。

其の時社長は、女史に向つて、「貴女はどうしても從軍したいのですか」とお尋ねになつたので、此のまゝ戰爭が引き續くなら是非從軍したい旨を申上げると、社長は、「それは結構な事だ聞く處によれば、もう行李や、總べての準備が出來たさうだが、是非その繩を解かずに待つてゐて下さい」との事であつた。

感激にむせぶ、そわ〳〵した幾日かが過ぎた。そして其の月十四日午後十時五十分の列車で、廣島へ出發せよ、との御沙汰に接した。この時は樺山大將夫人も、醫師、事務員各一名附添で行かれた。第一發は高山夫人の引率、第二發は仁禮子爵夫人、第三發は樺山夫人引率で女史等も之に屬して居たのである。かくて女史はその宿望としての從軍に對し、心から感謝を以て其の任務を果したのであつた。

凱旋後は、その功勞によりて、勳八等寶冠章及び、赤十字社より、特別社員に列せられ、金品をも頂戴したのである。此の寶冠章は、今までまだ女官にも、賜らせられず、宮家の御婚儀の際勳位の高き方に御下賜されるのであるが、未だ民間には御下賜された者はない。

それだけに女史に御下賜なさるのには、中々、問題があつたさうである。そこで此の寶冠章を頂いた後、佐野社長はわざ〳〵女史をお召しになつて、

「貴女は未だ年の若い事である故、將來品性をよく保ち、此の勳章に對して、恥づる行爲のない樣になさい」との御注意があり、石黑閣下からも、同樣の御注意があつた。尙三十九年には、石黑閣下より、更に次の樣な御戒と、御賞めの意味の直筆を軸としたものを頂戴した。

女史は常に之を服膺し、自分の戒となすのみならず、子女の訓戒に活用した。女史の信念は之を轉機として、益々根强いものとなり、自己の善なりと信ずるところは、直ちに子女の教育に反映せしめる、此處に體驗主義の教育觀は打ち樹てられたのであつた。

軸の寫

立業建功。事々要從實地着脚。若少慕聲聞。便爲僞果。講道修德。愈々要從虛處立基。若稍〻訓功効。便落塵情。

秋間女史從日清役而有功。賜寶冠勳章。蓋異數也。書以慶之併規後。

況齋學人　石黒忠悳

更に日露戰爭の際には女史は、愛國婦人會の役員となり、終日終夜、名流貴顯の婦人と共に活動したが、同會事務長佐藤少將に從軍の事を御相談申上げた處、少將は、

「この樣に働いて貰ふのは、會としては結構ですが、寶冠章に對して從軍せないと、申譯がありますまい」と申されたので、直ちに赤十字社へ行き、その出願をした。

其處で此度は日清戰役の時のやうに、篤志看護婦として配慮を受けるのは氣の毒と思ひ、普通の看護婦として、表面は俸給を戴くのであるが、凱旋後は寄附する約束で、安々從軍の許可を得た。

奮鬪四五ヶ月の後歸京し、其の時戴いた俸給全部は、赤十字社、愛國婦人會、婦人農藝會等に寄附した。爾後女史は各婦人慈善事業團體の幹部として、本格的な活躍に入つたのである。

慈善事業の數々

順境な家庭愛に育まれた女史は、その信仰的根據をば、父母の慈育愛撫に受け、その信仰はひたむきに實踐躬行に進展した。その一生を通ずる慈善事業は、實に女史の信念の流露であり、全人格の反映であつた。

女史の公共慈善事業は餘りに多いので、一々茲に述べる事は出來ないのであるが、その主なるものを述べやうと思ふ。

大日本赤十字社では、女史が日清の役に、篤志看護婦として、國事に盡された爲め、明治三十九年六月、特別社員に拔擢し、外に金參拾五圓を贈られた、女史は之より益々社の爲盡力された

明治三十五年十二月には、三多摩郡女子鄕友會が設けられ、女史は會長に就任し指導監督に努めた。

愛國婦人會には明治三十六年四月社員となり、同三十七年三月、東京支部幹事に選ばれ、同

三十九年七月本郷區幹事部主任を囑託され、同四十二年十月本郷區技藝部委員に推薦せられ、同四十四年六月、支部評議員を囑託せられ、昭和三年二月六日、愛國婦人會總裁宮故依仁親王妃周子殿下より同會評議員を囑託せられた。

生來責任感の强い女史は益々之に感激し、粉骨碎心この責に當つたので遂に、一等有功章附加章まで御下賜されたことは、眞に光榮とするところである。

本郷區兵事義會婦人部には、明治三十八年六月より、該會の幹事として働いてゐる。之は今日では本郷婦人會と改められた。

報德會は明治四十年八月に設立したのである。この動機は女史が相州片瀬に轉地してゐた時で當時は戰後國運の發展につれて、人心漸く奢侈に流れんとする時運に際會したので、女史は心ひそかに之を憂慮してゐた。

たま〳〵二宮尊德の著書を得た女史は、大いに悟るところあり、勇躍して、一氣呵成に讀了しこの報德の敎を布敎し實行することは時局の急務なることを自覺したのである。

女史は大いに期するところあり、鄕里平山に歸り、村民を糾合し、茲に報德會を起したのであるが、非常な勢を以て發展し、勤儉貯畜の美風は全村に充滿するに至つた。

大日本婦人農藝會は、明治三十八年七月に設け、自費を以て、東京府、千葉縣、群馬縣其他を遊說し、日露戰役後、婦人の家事經營に就いて、勤儉貯蓄を力行すべきを宣傳し、大いにその成績をあげたのである。

尙女史は之等勤儉貯蓄の具体的研究に腐心し、當時模範村として知られたる、靜岡縣賀茂郡稻取村へ出張し、有名な田村々長に面會し、その實狀を調査して、この長所を移入する等、多大なる盡力を捧げた。

尙大正十四年十一月十日には、大正天皇の御即位を記念すべく、校內に御大典記念會を開き、會長として指導の任に當られた。

今その事業の一二を擧げるなら、每年御大典記念日の前後に於て、バザー、又は映畫其他の會を開き、其の收益を以て、貧困者や、公共の爲に殉死したものや、育英事業に寄附する等、大い

に貢献するところがあつた。

大正八年十一月、帝國教育會に於て、女學校長會議の際、私立中等學校には未だ當局より、何等の補助もないので、來議會には、其の補助申請書を提出すべき事を、女史は提議したのであるが、一同賛成したので、尙男子の中等學校の方へも相談した。

ところが、其の翌年一月に、福岡の九州高等女學校長、釜瀬新平氏、四國の善通寺高等女學校長、古市由藏氏、神戸精華高等女學校長、中川四市氏、の三氏が相謀つて、東京と一致し、全國的に補助問題の運動を起すべく、前記三氏は、其の激文を作製し發送されたのであるが、東京にはその事務所の無き爲め、釜瀬校長は女史の學校を受付事務所に懇願された。これは釜瀬校長の令室と女史とは、信仰上の友である關係上、かうした取計らひをされたのであらうが、內省的な女史としては、男子校長に先んじて、事務所を提供する事は本意ではなかつたのであるが、眞の教育施設を徹底させる爲の運動であり、正しい事は後に必ず分ることであるし、又この時は既に書面も全國に發達された後で詮方なく、男女中等學校の役員方の諒解を求めることにした。

そこで三氏は協議の上、東京の役員方に、陳辯し、早速男子中等學校の組合會を開くことになつた。此の內部の盡力者としては、當時政界に雄飛せる、知名の士があり、いろ〳〵と指導援助を與へられたのである。それからは時々會議が女史の學校に設けてある事務所に開かれ、文部省へ補助請願書を提出する運びとなつた。

かうした關係から女史は創立委員、幹事又は評議員となり、事務所は創立當時より、無償にて貸したのである。大震災當時の會の活動には目覺しいものがあつた。ところが自分の學校は發展に發展し、多忙なので、大正十四年五月には、逐に協議の上事務所を東京府立第一中學校に移した。

東京府立中等學校協會も、前の會の如き順序で、大正九年六月、矢張り創立委員として設立し其の後幹事となつて、其の職に當つてゐる。

以上の如く、自己の學校を無償で事務所に提供し、役員として貢献した爲め、佛國製置時計を贈られた。

至難なる學校經營

錦秋實用女學校時代は規模が小さい爲め、それ程苦心も感じなかつたのであるが、錦秋高等女學校を自己所有の現地、眞砂町に建設してからは、その經營上の苦心は筆舌に盡し難いものがあつた。

大正二年設立から、同九年三月までは、生徒數も少く、毎月の欠損は、何れも女史の貸家より上る收益其他より補給して來たが、其の不足が餘りにも過大なので、一時は東京府へ金をつけて寄附しようと考へた事も時々あつたのであるが、卒業生も可哀相になり、又自分の決心の遂げられぬを殘念に思ひ、この困難に打ち克つて來たが、大正九年頃より、急に生徒も增し、年々發展し遂に今日に至つたのである。

大正元年十月の實科高女の認可に當つては、非常な苦心をしたが、此の申請した學校の多くは却下されたのであるが、幸にも同校が認可されたことは、確かに神明の加護であつた。

校地を眞砂町に移し借財して新校舍を建築する時には、財政の困窮を豫想し、暫時決心がつかぬので、武州高尾山、藥王院へ參り、二週間枇杷の瀧の不動堂にこもり、瀧にかゝつて業をしたところ、十三日目になつて、神慮の致すところか、翻然として悟るところあり、校舍新築、高等女學校の認可に身命を捧げて、女子教育に盡すべく意を固めた。

翌朝お頂上をして、藥王院へお禮のお祈りをし、實家へいつて、その決意を祖先に報告した。折よく居合せた、次姉にも話したが、何れも婉曲にこれを否定されたが、一度神に誓つた女史の心は動かすべくもあらず、遂に新校舍の新築を見るに至つた。

第二回の新築工事の際は餘りの心痛の爲め重い眼病に罹り、一時は失明するかと思はれたが、この時も高尾山藥王院へ參り、五十五日間瀧にかゝり、身を潔め、その決心を固くすると共に、病氣の平癒を禱つたところ、靈驗の爲か、病氣も癒り、學校も榮えるやうになつたのである。

女史が一身の苦悶を解決する爲には、常に神にすがり、專心それに歸依して、その靈驗を得、一度その靈驗を得たる上は、一意これに爆進する、敬神の念に出發せる自身力は、かくして常に

女史に展開の道を與へ、信仰により得たる靈驗は直ちに祖先に報告する等、全く女史の敬神、崇祖は空理空論に非ずして、直ちに實行するところ、眞に女史の至大なる信念の現れであり、かくして始めて眞の信仰生活の奥義に到達し得たものと云ふべきである。

大震災當時の女史

突如帝都を灰塵の巷に化せしめた關東大震災の怯えに悶々としてゐる、大正十二年九月三日、全國私立中等學校聯合會幹事、田中平太郎氏は、秋間女史を訪れ、罹災學校に對しての緊急會議を提議された。女史は固より望むところであつたので、種々斡旋し、罹災中學校、女學校の住所不明の者の爲に、東京日日新聞、報知新聞に廣告を出してその動靜を明かにする一方、女史は罹災者救護に對して、本郷區長、本富士警察署長、と謀つて、避難の人々を、自己の經營にかゝる錦秋高等女學校に收容して、教職員共に救護に盡力された。

この時學校は幸に罹災を免れたのであるが、生徒の父兄の家も燒失したものが多い故、それ等の方は、一般罹災者と共に學校に收容し、教職員は晝夜交代に受付けの勞をとられたのである。

然し罹災者の收容にも制限ある爲め、止むなく、十三日を以て打切り、十四日には自分の學校の生徒がどの位罹災して、どの位燒死したかを調べたが、意外な數に上つてゐるので、女史はいよ〳〵實地踏査に當るべく決意されたのである。

そこで女史は市内くまなく、罹災生徒の狀況を調べ、嚴重なる警戒網をくぐつて、教へ子をあさる慈愛の念には、全く敬虔の情を禁じ得ないのであつた。丁度この頃、上野附近の井戸には、或者が毒を投じたとの噂が立つた。水道は皆破裂して役に立たぬので、女史は寄宿舍の生徒、春日町青年團の手を借り、春日神社の神官に頼み、四つの井戸から水を汲み上げて、避難の人達に與へた。

その他麥湯を作つて、收容した人の外、往來を通る罹災者にまで接待する等、誠意の限りを盡したのである。この時の女史の活動こそ全く神來の感があつたが、悲慘なる罹災者の狀態を目擊した女史の慈愛が本能的に發動したものであらう。

女史は當時連夜僅か二時間の睡眠を取られたに過ぎないのであるが、何等健康を害する事の無かつたことは、實に奇蹟的な感があつた。

修養と信仰への道程

幼時の修養と信仰は、兩親の合理的教育に端を發するのであるが、女史は明治五年三月より、同十年まで、大村サヨ氏の裁縫教習所で裁縫を修め、八年二月より十一年五月迄、國漢學者大澤教之助氏に就きて國漢學を修めた。華道は上京して後、石州流家元青瓢庵關秀氏に就きて學び免許を受け、禮式を四條流家元宮北一流齊につきて學び、師範科の免許を受けた。佛教は釋雲照津師に、基督教を各牧師によつて修めたが、その晩年は、古典學者川面凡兒先生につき、神道及精神修養に關して學んだ。就中、その信仰修養は先生の影響を受けることが至大であつた。

女史は幼時より信仰の念强く、神佛祖先に對しては、常に禮拜、祈願を忘れなかつた。御自分の室には、神棚を設けて神を祭り、朝夕、祝詞をあげて、萬人の幸福を祈念してゐる。

御大典記念會を設けてからは、學校の講堂及び教室には、「敬神」の額を掲げ、授業前には必ずこの額に最敬禮を行つて後、授業を始めるのである。尙學校に於ては別に修養の時間を置いて、生徒の精神修養を爲し、又之と關聯する、天の鳥船體操を行ひ、身心の修養に努めてゐる。

慈善に對しては常にその實行に努めてゐる。即ち、明治三十年の三陸海嘯の際は、諸處より金品を募集し、被害地へ送り救助の勞を執り、大正六年十月一日には、南葛飾郡の風水害の際には同郡設立の善後會に贊助して、本校生徒の作製品、及本郷區、小石川區、各小學校の贊成を得て物品一萬点以上と、慈善市の純益金とを、悉く被害地の學校に送つた。その他枚擧に暇ないのである。

最近の光榮

女史の眞劍なる教育は今や、斯界の認むるところとなり長くも大正四年十一月十六日には御大典の大饗にあづかる光榮に浴した。

昭和二年二月七日、大正天皇の御大葬には參列の光榮を得、又
昭和三年十一月十六日、御大典には御大饗に與るを得、更に
昭和三年十一月十七日、には多年教育に貢献した功績により、賞勳局より表彰狀、及銀盃御下賜に與つたことは、女史一代の光榮である。

其の他昭和二年十一月五日、機動演習の際秩父宮殿下には女史の生家に御宿泊遊ばされたことは、誠に一家の一大名譽とするところであつて、且又祖先の餘光の然らしめたものとも言ふべきであり、女史は益々これに感激し敬神、崇祖の信仰を深めつゝあるのである。

日常の生活

女史の生活は凡て信仰に根ざした、眞實の生活である。廿八才で尼法師の心になつて、人欲の私を捨て、一身を捧げて社會國家に盡すべく、大神に誓ひ、その後は只管に、信仰を確立し漸次その歩を進めた。

女史の信仰は、單に自己を中心とした俠義なものではない、自己に出發して、隣人に及び更に一國、世界の、人類の幸福を願つて止まないのである。

住居等は非常に質素を旨とし、全く雨露を凌ぐに過ぎない、虚飾を欲しない女史は、その質素の生活を以て、信仰生活に最適のものとし、安住せられて居る。

着物等も公式の場合を除いては、三度も四度も染め替へたり洗つたり、張つたりしたものを使用してゐる。女史のこの美しい信念を藏した、身體にはつゞれも錦の感があるのであり、質素にすればするだけ奥ゆかしさを感するのである。

食事の際など必ず豊受大神に三唱し奉り、更に無縁の魂の爲めに、少しづゝ小皿に分けて供養した後、御自身は頂くのであつて、女史の人間愛はかうした些細な處にまで擡頭してゐることは誠に有難い極みである。

要するに女史の生活は、神祖のみ心に添ひ奉る、聖人の生活と言ふべきであらう。

女史の趣味と生葬式を出す心境

女史は名實共に實踐躬行の人であり、千變萬化湧き上る宗教的信仰、教育的信念を直ちに實行に移すことに、常に趣味を感じてゐたものと思はれる。困苦缺乏の中にも自己の信念に基き、社會公共事業に貢献し、教育的理想を實現する等、女史の事業は即趣味に根ざしてゐたものである。

女史はこの度、郷里平山の宗印寺境内に清淨な墓地を作り、今年十一月六日郷里に於て、更に錦秋高女の增築完成を待つて、東京に於て、生葬式を營むことになつた。女史はその一身上につきても、未だ嘗て他人の助力を仰いだ事がない、眞に一生を通じての獨立獨行の人としての高德な人である。二十年來苦心して、現在の學校を經營し、全く獨力で築き上げた女史はこれを以て神明の加護なりとして、その感謝の念より生前社會公共事業に貢献されたのであるが、獨立獨行の人だけに自己の身上につきては、死んでからも御厄介になり度くないとの信念に出發したもので、茲に七十二歲の生涯を華々しく終結せんとせられたのである。

——完——

錦秋高等女學校長
秋間爲子女史の足跡

昭和七年十一月十四日印刷
昭和七年十一月十八日發行

【非賣品】

著者　日統社編

東京市芝區西久保巴町四十六番地
發行者　中村一市

東京市芝區西久保巴町十七番地
印刷所　日統社印刷部

東京市芝區西久保巴町十七番地
印刷者　荒川富次郎

不許複製

東京市芝區西久保巴町四十六番地
發行所　日統社
電話芝(43)二五九四番

中村一一著

大和魂の本體

四六判洋裝假製
紙數二百五十餘頁

近刊

現在歐洲の識者、思想家等の間に於て、東洋文化に對する禮讃、渇仰の聲と共に、世界無比なる我大和魂の研究熱が擡頭して來た。然らば大和魂とは何か？　即ち日本國民的意識であつて、そこに政治あり、經濟あり、宗教がある。
本書は日本國民思想の根本的規準たる、大和魂の檢討であり、考察である。

中村一一著

日本主義的一考察

附　玉塚氏の天保錢主義

科學文化の進展に伴れて、極度に理論偏重、物質萬能となつた現代生活に對しての日本主義的一考察と明治時代の自我、功利擡頭に對して、道義的精神を强調した天保錢主義

東京市芝區西久保巴町四十六番地
日統社發行
御申越次第無料郵送致します

中村一一著

服部金太郎氏の横顔

リットン報告書の支那認識

一、我國時計工業の發展と服部氏、二、彼の個性に顯れた正直と正確、三、彼は財界唯一の人格者、四、政治家と肌の合はぬ彼、五、服部報公會を設立した彼。

小布施新三郎小傳

愛國の士

小布施氏が、愛國の至誠の爲め、飛行機獻納に三十一万圓を出された事は、我國最初であり其後續々愛國號の獻納となつた。即ち先覺者小布施氏の小傳。

水原嘉兵衞小傳

奮鬪の人

水原氏は、克己、忍耐、の權化である、その切瑳琢磨の辛勞は活ける模範の典型である。又謙讓な人格者として知られた菓子舗『清月』主の奮鬪傳

日本主義的動向

附　東京府農工銀行支配人　杉本正幸氏の信仰生活

國難打開の爲めに國民の血潮から喚起された、大和民族精神の動向と一信念の人たる杉本正幸氏の尊い生活體驗の一觀察

東京市芝區西久保巴町四十六番地
日統社發行
御申越次第無料郵送致します

近刊豫告

ヤマサ醤油の沿革と　濱口儀兵衛氏

清廉純情の　清水釘吉氏

外交の偉才　渡辺幸吉氏

既刊

國家中心主義と　澁谷正吉氏

澁谷正吉氏は現下實業界に飛躍する好個の紳士であると同時に、皇室中心主義を高唱し、併せて刻下の行き結まれる經濟界を打開發展に努力せる隱れた國士的存在である。彼の過去の奮闘は、よく懦夫をして起たしめるものである。即ち好個の記錄

東京市芝區西久保巴町四十六番地　日統社發行　御申越次第無料郵送致しますす

近刊

ヤマ寺夜話の語彙と　濱口儀兵衛氏

刊行

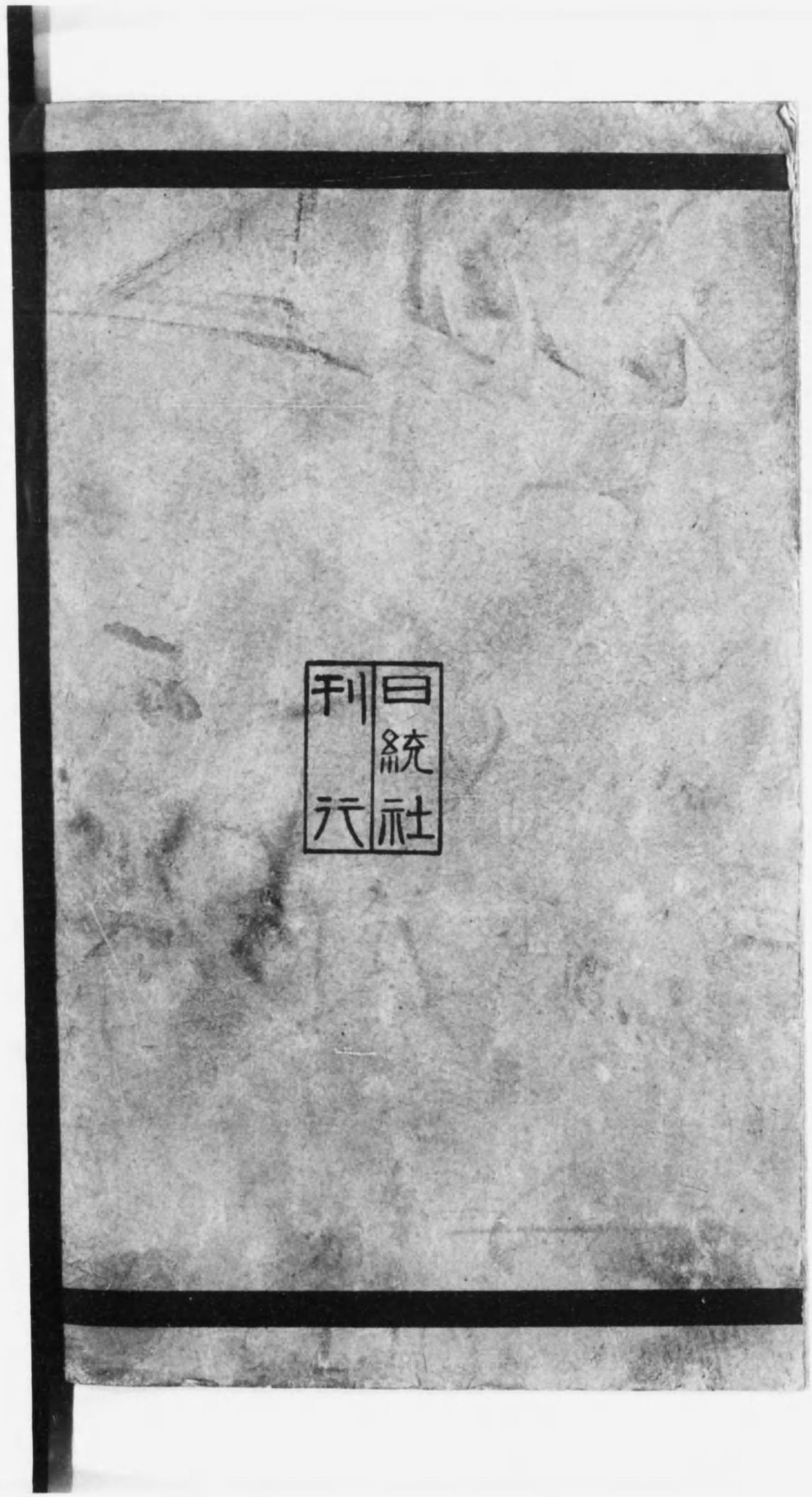
詩集　繭の　清水釘吉氏

告知

外交の　渡辺幸吉氏

既刊

國家中心主義と　澁谷正吉氏

東京市芝區愛宕町二丁目
振替口座六千四百四番
日統社發行
大阪市北區中之島
振替口座大阪二千五百番

終